

滋賀県は、国宝・重要文化財の指定数が東京、京都、奈良に次いで4位。国宝の建造物に限ると京都、奈良について多くなっています。しかし、もし「滋賀の美」なるものを考えるのだとしたら、そうした指定文化財に象徴されるような美術史上の重要性だけでなく、制作や流通や保存が、風土とともにあることに目を向ける必要があります。

1. 神と仏の美

滋賀県内の宗教美術は、寺社の所蔵であっても周囲に暮らす人たちに守られてきたケースが多いことを特徴としています。たとえば、今では国宝に指定されている渡岸寺観音堂(向源寺)の十一面観音像も、戦の際には村人たちが持ち出し土に埋めたとされています。もっとも象徴的なのが、黒田安念寺の菩薩形立像(いも観音)(通称「いも観音」)です。これも戦時には土に埋められ、その後、川の水で洗われました。それもあってか、昭和初期までは、夏に川で仏像を洗う習慣があったそうです。



写真2-6-1 黒田安念寺 菩薩形立像(いも観音)
写真提供:長浜市

2. 庭

《旧秀隣寺庭園》《圓滿院庭園》《光浄院庭園》など国指定名勝となっている庭が京都に次いで多いのが滋賀県です。また、江戸時代後期には、近江を中心にたくさんの庭を手掛けた勝元宗盛(鈍穴)という作庭家もいました。

3. 大津絵

東海道五十三次の53番目の宿場である大津で、江戸時代に土産物や縁起物として人気だったのが大津絵です。はじめは仏画が中心でしたが、人気や注文の変化を受けて、幕末までには画題が、「藤娘」「鬼の念仏」「瓢箪鯰」など、世俗的なもの十種に絞り込まれていきました。ピカソやミロのコレクションに入っていたことが今では知られています。



写真2-6-2▶
紀樺亭 大津絵図 1804年
滋賀県立琵琶湖文化館蔵



4. 近代の絵画

滋賀出身ということでは、岸派の四代目総帥の岸竹堂(1826年-1897年)や、帝室技芸員ともなった山元春挙(1872年-1933年)が著名です。また文化勲章を受章した小倉遊亀(1895年-2000年)もいます。ただ、近江の風土をよく描いた画家といったら、野口謙蔵(1901年-1944年)を置いて他にいないでしょう。のびやかな筆致で蒲生野を描いた彼の作品には、時代を感じさせない魅力があります。

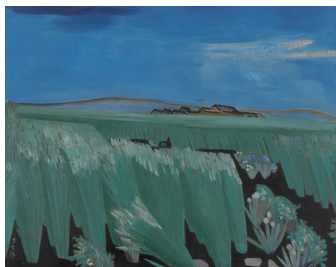


写真2-6-3 野口謙蔵 五月の風景
1934年 滋賀県立美術館蔵

5. 信楽

六古窯のひとつである信楽。狸の置物で知られていますが、他にも、火鉢、植木鉢、傘立てなどが、全国で使われていました。生活習慣の変化やプラスチックの台頭によりそれらの需要がなくなってしまうと、信楽焼の販売額は大きく減ってしまいました。しかし現在、奈良美智など現代美術のアーティストたちから、大きなものをつくるのに長けてきた信楽の技術と設備が注目を集めています。

6. 人間国宝に指定された工芸作家たち

人間国宝となった作家で、滋賀の風土とのつながりを公言しているひとりが、紬織の志村ふくみ(1924年-)です。彼女は1968年に制作の拠点を京都に移してから、「私にとって琵琶湖は心の象徴です」とその重要性を明言しています。また木工芸の宮本貞治(1953年-)は琵琶湖の波紋が作品に影響を与えていると言いますし、青磁の神農巖(1957年-)が滋賀にアトリエを構えたのも、空と湖の青さがあったからだそうです。鉄釉陶器の清水卯一(1926年-2004年)が比良山系の蓬莱山の麓に窯を築いたのも、よりよい土を求めてのことでした。

7. 近代の絵画

滋賀県では、戦後まもない頃から障害者福祉の実践が始まり、その中で、造形活動が積極的に導入されていました。その取り組みを支えていたのが、信楽以外の土地でも、造形に適した土が容易に手に入ったことです。最近では、充実した制作環境を整えているやまなみ工房の活動が、国内外から注目を集めています。

写真2-6-4▶

澤田真一 無題 制作年不詳
滋賀県立美術館蔵



滋賀県立美術館 保坂 健二郎